

2026年海運講習会を開催  
～新たな船出に心からのエールを～

当協会は、新入社員の社会人としての門出を祝すと共に、海運業界で働く者としての心構えや自覚醸成に資することを目的として、会員会社の新入社員を主な対象に、1957年から毎年「海運講習会」を開催しております。

本年は、3月31日に会場(海運ビル)およびライブ配信を活用したハイブリッド形式にて開催し、海運業界や世界で活躍する社会人の先輩方より下記プログラムのテーマでご講演をいただき、全国各地から24社の約300名が受講しました。

受講後のWebアンケートでは、「色々な角度から海運や海に関する話を聞くことができ、非常に勉強になった。また働く上で大切にしている価値観や海運業界の今を聞くことができ、今後社会人なるうえで参考になった」「海運の話だけではなく、松田さんによる実際に素晴らしい成績を残しているアスリートのお話を聞いたのが、ビジネスマンとして一番大事なマインドの作り方を考えるきっかけとなってよかった」等の感想が寄せられました。

<講演の概要>

1. 「世界を動かす、未来を創る。－海運の『面白さ』と『底力』を君に－」

当協会常勤副会長 加藤 雅徳

日本は裾野の広い海事産業群を持つ世界有数の海運大国であり、外航・内航ともに日本の暮らしと産業を支えていることをはじめに説明しました。海運業界が取り組む課題としてはDXとGXを取り上げ、自動運航船の実用化に向けた取り組みや、IMOを中心とする「ネットゼロ」の枠組み作り等を紹介しました。気候変動や地政学リスク等、海運を取り巻く厳しい環境にも言及し、「安全は一丁目一番地。そのうえで、船に乗る仲間の命、顧客の荷物、会社の資産である船舶、これらをどう守るかを考えていくことが大切」と述べました。「読書や、メモをとることを心掛けると良い。今後AIの活用も進むと思うが、最終的に判断するのは人間。AIが作ってくれるものを読んで考える力を磨き、AIと上手に付き合っていっていただきたい」と締めくくり、受講者の活躍に期待を寄せました。



講演する加藤副会長

## 2. 「自分で進み、誰かと伸びる～一人ではたどり着けなかった高みへ～」

競泳オリンピックメダリスト 松田 丈志 氏

自身の競技人生で得た学びや気づきについて、ターニングポイントとなった出来事に触れながら講演しました。影響を受けた人物として「誰よりも僕（松田氏）の可能性を信じてくれた」という久世由美子コーチを挙げ、当時ライバルだった選手との合同合宿を交渉して実現させたエピソード等を交えつつ、久世コーチから学んだ、実行力の大切さを語りました。

オリンピックに初出場したアテネ大会では、悔しい思いをしたものの「代表チームや応援してくれる周りの人たちと、『共に頑張る』意識が自身に足りなかったと気づいた」と当時を振り返りました。それ以降は、積極的に周りとのコミュニケーションをとったり助言を求めたりするように努め、その結果「周りの力を自分の力に変えたから成長スピードをあげることができ、次の大会からメダルを獲得できた」と話しました。講演の最後には、「周りの力を自分の力に変えられるよう、周りから応援される人になってほしい」と、受講者にエールを送りました。



講演する松田氏



ロンドン大会の銀メダル

## 3. 船長講話「さまざまな船と安全運航のあれこれ」

一般社団法人日本船長協会 参与 小尾 達也 氏

自身のこれまでの経験に触れながら、代表的なドライバルク、タンカー等から FSPO、シャトルタンカーまで様々な船種があることを説明しました。次に、航海士と機関士の業務内容と働き方について、写真やクイズを交えて説明したほか、荒天時の視界や運河通航風景を動画で視聴し、航海中の様子も紹介しました。衛星通信や無線通信などの通信ツールにも言及し、宇宙ゴミの落下地点や軍事演習海域の情報を通信で得ることで、安全航行に努めていると解説したほか、国際的な取り決めや検査制度等の安全運航のためのガイドラインも紹介しました。

講演の最後には、「物事を決めつけず、いつも基本に立ち返ることを大事にしたい」と、自身が業務の際に意識することを伝え、「自然の偉大さの前では、船は小さい。自分の小ささを知り、周り支えあっていることを忘れずにいてほしい。」としめくくり、受講者の新たな船出を祝いました。



講演する小尾船長



会場（海運ビル）の様子



松田氏の質疑応答で登壇する受講者

※1：競泳選手としてオリンピックには、2004年アテネ大会より4大会連続出場し4つのメダルを獲得。2012年ロンドン大会では日本代表チームのキャプテンを務め、出場した400mメドレーリレー後のインタビューで「康介さんを手ぶらで帰すわけにはいかない」とコメントした言葉が2012年の新語・流行語大賞のトップテンにノミネートされた。2016年のリオデジャネイロ大会では、日本競泳界最年長（当時32歳）でのオリンピック出場・メダル獲得の記録を作る。同年の国体を最後に28年の競技活動を引退。現在は数々のスポーツ団体の役職に就き、スポーツの普及・発展に向けた活動を中心に、スポーツジャーナリストとしても活動中。

※2：1994年大阪商船三井船舶（現 商船三井）入社。コンテナ船、LNG船、石炭船などに乗務し、2013年船長に実職就任。船長として、乗船勤務と船舶管理業務、海外勤務を経て、安全運航支援センター等で陸上業務に従事。2026年3月より日本船長協会に出向し、海運の重要性や国際的な視野を啓発する活動を支援・展開する。